

## 歴史的分野授業実践例

身近な地域の歴史を位置づけた単元構成と学び方を学ぶ場を意識した授業  
～「文明の起こりと日本の成り立ち」の実践を通して～

高山市立松倉中学校 谷口 陽一

## 1 単元指導計画の作成にあたって

本誌別掲の指導計画「文明の起こりと日本の成り立ち」は、文化の発展や国家の形成について動的なイメージを培うために、日本に生じた集団を中心に、東アジアや日本列島における他の集団とのかかわりを軸として構成している。

指導計画の内容は、基本的に「歴史的分野

2 内容 (2)古代までの日本 アイ」にそって  
いる。ただ、沖縄・北海道・東北北部などの当時の状況を考えると、「大和朝廷による統一」がなされたとすることは難しい。そこで「大和朝廷を中心とする大和國家の勢力が拡大した」との事実認識を形成しようと意図している。

また、「歴史的分野 3 内容の取扱い」に関して、以下のような配慮をした。

アをふまえて、扱う歴史的な事象を重点的に選んでいる。大和國家が勢力を拡大していく過程の学習は、國家形成のイメージを描くために適していると考え、古墳時代に若干多めに時間を費やしている。

イをふまえて、世界の歴史については、日本とかかわりが深い東アジアの歴史的な事象を中心に、日本の歴史を理解する背景として扱っている。日本に文化を伝えた地域として中国の文明や古代帝國を、卑弥呼が利用した国として東アジアの中心であった中国を位置づけている。

ウをふまえて、日本列島と大陸との距離や文化が近いことと、個々の歴史的な事象が東アジアや日本列島などにおいてどの程度の地理的な広がりを持っているのかを印象づけようとしている。國家が形成されていく過程は特定の集團の勢力範囲が拡大していく過程にほかならない。そうした動きに現在の日本國の範囲は意味を持たないので、関連範囲を確認したい。

エをふまえて、卑弥呼と両面宿禰すくなをとりあげている。卑弥呼の魏への朝貢、宿禰と大和國家との戦いは、それぞれの時代の大きな流れを象徴する歴史的な事象であると判断した。

オをふまえて、身近な地域の歴史を位置づけ、考古学の成果をできる限り取り入れようとしている。その位置づけについて、次項で述べる。

## 2 身近な地域の歴史の位置づけと実践例

「2 内容 (1)歴史の流れと地域の歴史 イ」に関する(内容の取扱い)は、

- a 内容の(2)以下とかかわらせて計画的に
- b 地域の特性に応じた時代を取り上げる
- c 人々の生活や生活に根ざした文化に着目
- d 博物館、郷土資料館などの活用

の4つの事柄から記述されている。

このうちaは全ての単元で地域の歴史的な事象を扱いうることを示しているが、bは“地域の歴史的な事象が時代の状況を典型的に反映し、我が國の歴史を理解するのに適切であるとは限らない”という現実をふまえている。

実際に、何時間かの授業を構成するに値する適切な歴史的な事象が、全ての単元で見つかることは限らない。また、思考と認識を深める単元構成をめざすと、扱える歴史的な事象が限られてくる。無理に扱おうと、思考や認識の流れを分断してしまったり、細部に入り込んで時間を費やし全体の調和を欠いてしまったりすることになりかねない。

そこで、単元構成にあたり、「地域の歴史的な事象を中心に扱う授業」と「地域の歴史的な事象を要素として扱う授業」があるにとらえた。後者は授業の構造に直接かかわらないので、地域の歴史的な事象を組み込んで単元に位置づけやすく、dを実現しやすい。

本誌別掲の指導計画「文明の起こりと日本の成り立ち」においては、「第6時 大和国家と飛驒の両面宿儺」が前者の授業である。ほぼ同じ骨子の小谷好廣氏の授業実践報告が、『社会科研究 第43号』に掲載されている。

また、「第2時 縄文文化と弥生文化」「第5時 古墳文化と大和国家」が後者の授業である。これらは、遺物や遺構についての情報が地域の情報ではなくても、一応成立する授業である。しかし、地域の情報があると、生徒たちの関心の高まりや認識の広がりが大きい。

なお、地域から出土した土器などの遺物や地域にある古墳などの遺構については、市町村教育委員会の文化財担当者に問い合わせると教えていただける。市町村教委が設置している郷土資料館などの施設や、(財)岐阜県文化財保護センターなどに依頼すれば、実物を借りられるかもしれない。例えば土器は、完全に復元した物を借りるのが困難でも、生徒が自由に触れて観察するための破片なら借りることができるだろう。土器としての史的価値が高くなくとも、直接触れ観察できることの教育的価値は高い。

### 3 学び方を学ぶ学習の位置づけ

改訂の主旨は、学び方を学ぶ学習においては「事実認識の方法を身に付けることが重要」としている。授業で育むことのできる事実認識の方法には、「内容にかかわってどのように歴史の流れをとらえ思考と認識を広げたり深めたりしていくのかという、事実認識の内容面」と、「対象にどのように働きかけて思考と認識を広げたり深めたりしていくのかという、事実認識の技能面」とが考えられる。

前者は、個々の歴史的事象からどのような歴史認識を培うのかにかかわる。単元や本時のねらいに直接つながる面であり、指導計画では「単元で培いたい学び方」として記述している。

後者は、授業での体験からどのような問題解決の手だてに習熟するのかにかかわる。単元や授業の構造、運営方法によって生徒がどのように活動するのかに直接つながる面であり、指導計画では特記していない。

技能面は、生徒たちの成長を願いどんな力を培うのか検討し授業を創るとき、当然考えてきたことである。ただ、技能面には、社会科の独自性にかかわる部分と、他の教科などにもかかわる部分とが混在する。そのため、指導計画に特記しないことも多く、学習活動や指導・援助から読みとれる場合もあるが、結果として未整理になりがちである。

なお、技能面に注目して実践研究する場合、社会科独自の部分を区別することが、内容面をおろそかにしないことと共に重要になる。あるいは、教科を越えどのような事実認識の技能を培うのか整理し、発達段階を明らかにすることが先決なのかもしれない。それができれば、社会科がどの部分を担うのか位置づけやすい。

### 4 学び方を学ぶ学習の実践例(次ページ参照)

「第1時 人類の文化の発展と日本列島」を例に、学び方を学ぶ学習の位置づけを示した。

事実認識の内容面については、本時で培いたい学び方として示し、事実認識の技能面については、本時の展開の中に体験させたい学び方として示している。

技能を身に付けるためには、体験を何度も重ねる必要がある。授業において、個々で、あるいは集団の中で体験を重ねるようにしたい。

### 5 成果と課題

地域の身近な歴史を位置づけたことにより、日本の歴史を身近に感じることができ、教科書で扱わない地域の歴史にも関心が高まった。

事実認識の内容面について、単元で培いたい学び方を明確にして実践したことにより、生徒たちの歴史の見方に広がりが見られた。

事実認識の技能面を育む方策について、これまで以上に自覚して実践したことにより、多くの生徒に技能の高まりが見られた。

事実認識の技能面について、社会科独自の部分と他の教育活動にもかかわる部分とを整理し発達段階を明らかにしていきたい。そのために、事実認識の技能面についても、より自覚を高め実践を積み上げ、研究したい。

